

L. v. ベートーヴェン：交響曲第6番 ヘ長調 作品68〈田園〉

交響曲第6番〈田園〉は、1807年の後半から翌年にかけて作曲された、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が37歳のときの交響曲である。

このころのベートーヴェンの私生活は明るいものではなかった。ウィーンでの定収入が得られず、金銭面での不満を抱えており、またヨゼフィーネ・ブルンスヴィク・フォン・コロンパ伯爵未亡人への4年に渡る恋も破局に至った。さらに、耳の持病も回復の見込みがないままだった。それでも、のちに「傑作の森」と称されるように、創作活動はきわめて充実した時期でもあった。

本作は、1808年12月22日の夜にアン・デア・ウィーン劇場で行われた演奏会で初演された。このときのプログラムは、全曲初演のベートーヴェン作品という野心的なもので、1曲目に演奏された〈田園〉の他にも、交響曲第5番〈運命〉や、自身がピアノ独奏も務めたピアノ協奏曲第4番、合唱幻想曲なども初演されている。なお、このときベートーヴェンと演奏者たちとの関係が険悪だったうえに、全体で4時間にもおよぶ長丁場で聴衆を疲弊させたこともあり、演奏会自体は成功したとはいえなかったようだ。

こんにちは〈田園〉の愛称で親しまれている本作だが、本来の副題は「Sinfonia pastorale」、つまり「牧歌的交響楽」である。この副題と、各楽章に記された標題はベートーヴェン自身による。標題から自然を単に模写した音楽であると思われがちだが、その内容は当時流行していた絵画的音楽とは一線を画す内容である。スケッチ帳には「音楽による絵画的描写というよりはむしろ感情の表現」との覚え書きが残されている。ちなみに、一連の標題の内容は、ドイツのオルガン奏者、ユスティーン・ハインリヒ・クネヒト（1752～1817）が1784年頃に作曲した交響曲〈自然の音楽的描写〉と酷似しており、ベートーヴェンがこの曲から何らかの影響を受けた可能性が高い。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、ヘ長調、4分の2拍子

「田舎に着いたときの、爽快な気分が目覚め」。ソナタ形式。冒頭でヴァイオリンが提示する第1主題、分散和音の下降形のような第2主題ともにのどかな曲調で、標題の示す通り晴れやかな感情を誘う楽章である。

第2楽章 アンダンテ・モルト・モtzo、変ロ長調、8分の12拍子

「小川のほとりの情景」。ソナタ形式。第1、第2主題の持つ性格や音形は先の楽章に通じるものがある。楽章の終盤には、ベートーヴェン自身がそれぞれの楽器パートに鳥の名前を書き込んだ箇所があり、フルートがナイチンゲール、オーボエがウズラ、クラリネットがカッコウを模倣する。

第3楽章 アンダンテ、ヘ長調、4分の3拍子

「農夫たちの楽しい集い」。スケルツォ形式の舞曲。おどけたような、素朴な踊りに興じる足音や笑い声が聴こえるような主題で始まる。中間部では、その気分は留めたままに、いよいよ興が乗ってきた、とでもいうように力強く拍が刻まれトランペットも加わる。

第4楽章 アレグロ、ヘ短調、4分の4拍子

「雷雨、嵐」。ベートーヴェンの交響曲としては珍しく、形式にとらわれない描写的な楽章である。ここからはまずティンパニ、そしてピッコロフルートとトロンボーンも加わり、高音域と低音域ともに音響が重厚さを増す。ひとしきり嵐を巻き起こしたのちに、晴れ間が戻ったことを予感させて次の楽章へ切れ目なく続く。

第5楽章 アレグレット、ヘ長調、8分の6拍子

「牧歌、嵐のあとの喜ばしい感謝に満ちた気持ち」。ロンド・ソナタ形式。クラリネットからホルンに受け渡される五度音程がいかにも牧歌的で、この旋律が第1主題を導く。第2主題には、他の楽章を思い出させるようなモチーフも聴こえる。終盤で劇的なクライマックスを迎えるものの、最後は余韻を残してさわやかに閉じられる。